

## 令和4年度訪問型家庭教育支援推進事業 第3回専門講座

1. 日 時 令和5年2月2日(木) 13時30分～16時00分

2. 場 所 日高川町農村環境改善センター

3. 参加者 参加者50名

4. 内 容 同町で行われた第1回専門講座を踏まえた講座としました。

### ◆講演とワークショップ

「切れ目のない支援と訪問型家庭教育支援について

～拡げよう、やってよかったこんな取組～

奈良学園大学 社会・国際連携センター長

人間教育学部 特任教授 善野 八千子 氏

### ◆講 演

1) 第3期和歌山県教育振興基本計画の中に見る「切れ目のない支援」

- ・ 幼児期の教育の充実
- ・ 不登校への対応
- ・ 家庭・地域の教育力の向上
- ・ 学校における人権教育の推進
- ・ 地域における人権教育の推進 等



2) 「切れ目のない支援」をすべての保護者にアウトリーチ型で届ける

= **訪問型家庭教育支援**

- ・ 家庭の孤立化を防ぐ
- ・ 家庭教育に関わる問題の発生予防や早期発見につなげる
- ・ チーム員が話を丁寧に聴くことにより保護者の家庭教育の悩みや不安を解消
- ・ 保護者が学びの場等につながることへ支援
- ・ 専門的な対応が必要な問題に対して関係諸機関の支援につなげる 等

3) 「切れ目のない支援」の実践事例

県内2市町の訪問型家庭教育支援チームの活動やチームリーダーの思い等について、善野先生が聞き取りをし、著された論文から学ぶ。

- ・ 元小学校教員 A 氏がリーダーを務め続けているチーム
- ・ 元保育所長の B 氏がリーダーを務め続けているチーム

⇒ **家庭教育支援チームが学校とともに取り組むことのできる人材・体制づくり**

4) 「切れ目のない支援」が必要である根拠

- ・「ペリー就学前プロジェクト」に見る幼児教育の重要性
- ・「幼児期から小学校1年生の家庭教育調査」に見る「幼児期の子どもが身につけておいたほうがよい要素」
- ・【生活科】小学校学習指導要領（平成29年告示）解説に見る「生活上必要な習慣や技能」

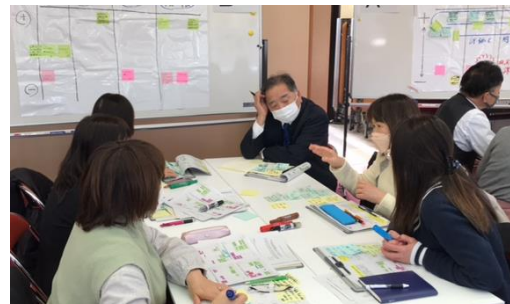


5) 「切れ目のない」講座 —継続的ワークショップを始める前に—

- ・第1回専門講座のワークショップのグループをもとに、新たなメンバーを加えたグループで協議することへの理解
- ・第1回専門講座の各グループの協議記録の中から、「やってよかった」取組を抽出
- ・「やってよかった」取組をさらに拡充する効果への理解と期待
- ・他市町の課題に「こうしてはいかが？」と取組を提案する効果への理解と期待



◆グループワーク



6) 「切れ目のない支援」を市町村で拡充するために

- ・支援チームと学校や福祉機関との取組の評価の共有
  - ・支援チームの自己評価と、学校等からの他者評価に対する正しい理解
- = 認め合うことにより、「やってよかった」取組の拡充につながっていく**
- = 今回の形のワークショップが、それぞれの市町村においても展開できるとよい**



## 5. アンケート（回収43名）

### ①参加者内訳（重複あり。）

家庭教育支援関係者	… 15名
学校職員	… 11名
市町村行政職員	… 10名
民生・児童委員	… 3名
福祉関係職員	… 2名
地域で子供に関わる活動をしている方	… 2名
学校運営協議会委員	… 1名
その他（保育所職員）	… 1名

### ②参加者の感想（一部抜粋）

#### ◎講演

- ・まずは町内の様々な機関が集まって、何からできそうか、どのようにしたらできるのかを考えてみることから始まるのかなと感じた。理由をつけてやらないことは簡単だが、何か始めなければと強く思った。
- ・いろんな立場の方がいて、取組があると知った。子育て真っ最中の立場からも、この取組が広がるとSOSを出しやすいとも感じた。
- ・講演はもちろん、ワークショップも前回に比べ意識の高いものだった。また学校関係の参加者が多く、学校と家庭教育のつながりが強く感じられた。善野先生の自己評価と他者評価、これからも自他共に見直しをしていきたいと思った。
- ・「今あることを嘆いて、できない理由を連ねるのは一番だめだ。」本当にその通りだと思った。
- ・取組を続けることの大切さも強く感じた。今後も続けていければ、いつか必ず結果が出ると思う。いつも力がわいてくるお話で、やる気が出てくる。
- ・私にできることは、まず保護者の声を丁寧に聴く事だと思った。また、この事象は地域によって千差万別なのだということがよく理解できた。
- ・前はチームもできておらず、なんとなく聞いていたお話が、チームが立ち上がり動き出した今、とてもイメージしやすく、今後活かしていきたいと感じた。
- ・切れ目のない支援の重要性を強く感じた。自分の立場で今出来ることをスモールステップで行っていきたいと思った。
- ・5歳までの教育で人生が決まるというお話を聞き、早いうちからの支援の重要性を改めて感じた。
- ・時代の変化の中で子育ての形態も変わり、お母さんたちの小さなお手伝いができる関わりを持てたらと更に強く感じた。幼稚園、保育園での勤務、子育て、

支援員研修で得たことを大切にして、活躍の場を持てたらと願う。

- ・善野先生の元気あふれる、わかりやすい講演がすばらしく、こちらもアクションを起こさねば、という気になった。

### ◎ワークショップ

- ・行政だけではどうにもならないことや、みんなで取り組み、成果を共有することの大切さを学んだ。
- ・色々な立場のお話が聞けて良かった。学校が必要としてくれて、初めて訪問型をやる意味があると改めて思った。
- ・待ち時間に子供が見ているスマホを絵本に替えたいとおっしゃっていた方がいた。
- ・芽を出して、本当に育っている所や、ようやく双葉が出始めたところ、まだ種まきの準備をしている所、いろいろな地域の意見を聞く事ができた。行政とのつながり、連携の必要性を痛感した。
- ・他の方の取組が知れてよかった。学校との連携を大切にしなければいけないと思った。
- ・支援員さんと面識がなかったが、このワークショップで出会い、正に「つなぐ」場となった。
- ・支援チームから学校への情報共有について、一方通行になってしまっている課題は、チーム作り、組織作りにおいて重要な課題であると感じた。
- ・話し出すと熱中している自分がいることに驚く。やはりグループ活動には事前の具体的説明や手立てが大切だと感じた。
- ・前と違うグループで新しい出会いがあった。ただ時間が足りず、なかなか深めるところまでいかなかった。他の市町から取り組み始めた時のことを聞かせてほしいと言われ、皆さんが家庭教育支援に興味をもたれていると実感した。
- ・特に来年の就学時健診では、支援チームの説明とともに保護者のグループワーク（簡単な）を企画し、つながりを深める取組をしたいと思った。
- ・自治体の取組の温度差を感じた。個人情報共有の観点からも行政との関係の必要性を感じた。